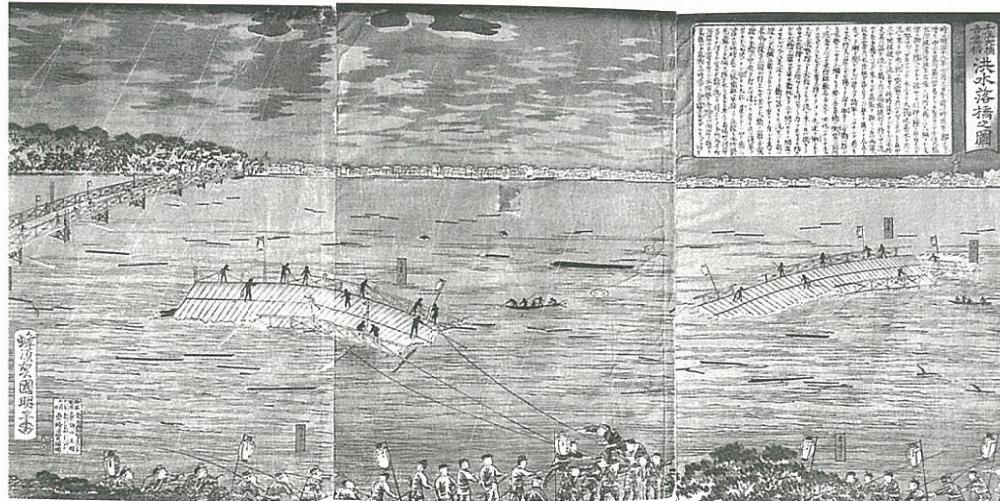


千住大橋が流された!



「千住大橋吾妻橋洪水落橋之図」(蜂須賀国明画、明治18年〈1885〉)

千住大橋が描かれてはいるが、場所は千住ではない。流れ流れて廻橋のやや上流。現在の墨田区東駒形一丁目辺から西岸を眺めた風景。右上に見える五重塔の影が浅草寺。作者・蜂須賀国明は天保6年(1835)生。明治21年(1888)没。画姓は歌川。師は歌川国貞初代(豊國三代)。自身は兄の名を継ぎ国明・二代を名乗った。役者絵・相撲絵のほか、文明開化期の風俗画もよく描いた。

荒川ふるさと 文化館だより

荒川区教育委員会
荒川ふるさと文化館
荒川区南千住6-63-1
TEL 03(3807)9234
登録(16)0023号

今年の夏、日本全国あちこちで水害が起きています。とはいっても、ほとんどの読者にとって、それはニュースの中のこと。気の毒とは思いつつも、水害の実感を持つのは中々難しいかもしれません。けれども、100年程前までのあらかわでは、洪水は特段珍しいことではなく、それゆえ他人事ではありますでした。明治18年(一八八五)7月の新聞は、秩父方面の山々からの鉄砲水が、荒川(現隅田川)・利根川に溢れ、やがて東京に洪水を引き起こすことは、「恒例の如くなるが」と伝えています。

さて、この洪水では、「千住大橋吾妻橋洪水落橋之図」という浮世絵が売り出されました。画面右側にひよっこり顔を覗かせている橋らしきものが、千住大橋(の残骸)で、その左には千住大橋がぶつかって流れられた吾妻橋、さらに左は激突寸前の廻橋が描かれています。画面が暗いのは、描かれてる時間が夜のため。6月28日から降り続いた雨は、7月1日に暴風雨。すでに千住はもとより尾久・三河島も堀から水が溢れ、通行もままならなくなっていましたといいます。3日午前1時には激しい水勢に乗つた大筏(いがた)一説に戸田川に架かっていた橋が千住大橋に激突し、橋は落ちてしましました。

こうした洪水などの際に、橋を守るべく活動したのが「水防組」で、絵の中では、サベルを持つ巡査の指示を受けながら、川岸、あるいは流れの橋の上で、揃いの半纏を着て活動しています。水防組とは、水害予防組合の略称で、明治8年に千住大橋、吾妻橋、両国橋、新大橋、永代橋の警備のために、警視庁の管轄下に設置されました。その母体は、日頃から筏に乗るなど

水上での活動を生業としていた材木問屋の川並薦です。ちなみに、千住の材木問屋は、江戸時代以来、千住大橋の水防を役目として果たす替わりに、普段は材木問屋として営業することを幕府から認められていました。水上での活動の巧みさは、千住大橋を守ろう努力していた小塚原組の一人が、吾妻橋手前まで残骸に乗つて流されていった

図を送り、救出されました。吾妻橋組も、手にしていた提灯を振つて、吾妻橋組に合図を送り、救出されました。吾妻橋組も、車地(人力で綱を引き上げる大きな轆轤)や綱、鍵綱、鳶口などを駆使し、橋に縄を掛け懸命に引っ張つて、落橋を防ごうとしたが、あえなく落ちてしまい、廻橋の手前で、ようやく岸に橋の残骸を引き寄せることができたようです。

その後、約3千人の現区域の人びとが救済を受け、また、橋を失つた川には渡船が設けられました。但し、渡船は有料で、ちょうど農作物の収穫期に当たつていたこともあって、1日30円もの売上があつたそうです。千住大橋の再建は急ピッチで進められ、11月26日には、徒步の往来が許され、31日には開橋式を迎えるました。

ところで、右上の文章の末尾には、千住大橋の残骸が河岸まで引き寄せられるのを見た、数千の見物人が拍手喝采したとあります。毎年「恒例」の洪水とはいっても、この橋の流失と廻橋の落橋の防止という出来事に、安堵と好奇の目を向けていたのかもしれません。

主要参考文献

「新聞・官報による明治の足立」、「荒川區史」、「新修荒川區史」上巻、「荒川区史」上巻、「東京市史稿」変災篇第二、〔新修荒川区史〕上、481頁)。

(亀川泰昭)

「小塚原ノ狸、

世間ヲ闊歩ス

当瓦版は、「奉公人請状之事」のパロディーである。したがって、文字が読めることを筆頭に、少なくとも、①「奉公人請状之事」という文書形式、

②書かれている出来事、を知つていないと、この瓦版は楽しめない。どちらも、後世の人間にとつては、やつかいな代物だ。①は、奉公人の契約の際に、当人の身元保証人である請人が、人主（親権者の場合が多い）や当人と連名して、奉公先へ差し出す証文のことで、書式は概ね決まっている。具体的には例えば『荒川ふるさと文化館常設展示図録』37頁の図版や、『概説古文書学近世編』などを参照されたい。ここで紙幅に限りがあるので先に進む。



「見聞雑記」第21冊（国立国会図書館蔵）

瓦版中、人主になつてゐるのは、「千住小塚原中宿、いたづらたぬ吉」の貸家に住まう「どびんやある九郎」君だ。なるほど彼が化けた土瓶には、足が生えている。一条目に、釜を宙に吊り上げ、土瓶を歩かせたことに偽りはないとあり、三条目は、もし内藤新宿の「うらめしやぶた右衛門」が別の場所に化けて出たら、彼が責任をとつて、「ぼうこん」先の神田豊島町の「亀持出右衛門」を腹太鼓を叩いてびっくりさせるとしている。

さて、彼のことを「君」付けで読んだのには訛がある。当時の噂話などを綴った『藤岡屋日記』などによれば、彼は小狸らしい。これらの記録によるところ、時は文久元年（一八六一）三月。舞台は、小塚原町中宿の小間物屋の裏店に住み、昼は農間飛脚、夜は表通りに屋台を出して鰻の蒲焼を商っていた松五郎の家である（瓦版に「うなぎや」とあるのはこれを指す）。そこで彼は、不思議な出来事を起こした。騒ぎとなつて、松五郎は代官所へ届を出すとともに、宗教者を呼び、祈祷を願つた。宗教者の口を介して「ある九郎」君が語るところによれば次の通り。「自分の親は一七年前、松五郎の父に打ち殺され、おまけに食べられてしまつた。この仇を討つため、怪異を起こすのだ。直ちに、親の菩提を弔い、一寺を建立し、さらに「一回忌の法要をせよ。」中々の親孝行な小狸である。その後、松五郎は、富士講の焚き上げをして、代官所からの検使を待つて、墓碑を建立した。すると、不思議なことは起こらなくなつたという。ただ騒ぎとなつて、墓まで建てさせられた松五郎は、災難

「ある九郎」君により福をもたらされたようである。律義な狸でもあつたわけだ。

ちなみに、さりげなく出てきた宗教者。こうした不思議な出来事を納める職業が、幕末の小塚原にあつたのである。その宗教者の口を借りて放たれた、「ある九郎」君のお話は、様々な媒体に載つて、世間を闊歩していく。まず、瓦版になる以前に、人を介したであろうし、「うらめしやぶた右衛門」と「亀持出右衛門」という、同じ頃デビューした当世評判の化け物仲間を得て、淨瑠璃狂言でも競演を果たした。

さて、「ある九郎」君の親の死後75年も経過した大正9年（一九一九）、『南千住町勢一班第一回』中、「名所旧蹟並宝物」の項に、「千住ヨ騒動トシテ一時名高カリシ狸ヲ埋葬セシ処ナリ」と紹介された。何時のことだかわからなくなっているばかりか、「ある九郎」君と親の区別さえ曖昧になつてゐる。人間社会の慣習に従えば、一七回忌、三三回忌はとつぐに過ぎ、墓の主の個性は失われているはずなので、人びとに忘れられていてもいたしかたない。ただ、どうやら「ある九郎」君は、最終的な落ち着き先を地域の「名所旧跡」としたといえよう。

ちなみに、「ある九郎」君が建てさせた「狸獸墓」は誓願寺境内に今もある。

ぼうこん人化状之事

一此おばけト申物、生國一念の国うらめし郡火の玉村

出生にて、慥ならざる化ものニ付、たぬき共うけ人ニ相立、
きでん宅へぼうこんに化いだし申候所せう也。

時こくの義ハよひの四ツ時より丑ミつ頃迄、御きう

金ベん大きさハぎとして、金ぼう一てう慥ニ受取

申候。御しきせ之義ハ、友ハおくびやうの

ふるへもの一枚、冬ハ二わひめに相みぢん

の玉一枚、可被下候事

一御ぼうく様、御ひやうはんの義ハ

申ニ不及、化もの之御さぼう

相そむかせ申間敷候。尤小

塚原之義ハ、釜を中につり上、

どびんをあるかせ候事など、

けつしていつわり無御座候。

若此ものとしま丁の様ニ、

御大切成かめを持、かけおち

いたし候ハシ、人がわりにハ、くわいだんの

大入道をさし上、下ばんもどろくの御間をかゝさせ申間敷候。

しうねん之義ハ、代々しつと宗にて、寺ハ新宿ぶたや横丁、おかミ山

井戸から和尚りんきニまぎれ無御座候。御はつどうの化れん宗にて

ハ無之、若此化物義ニ付跡々外々にて化いだし候歟、又ハ三ヶ所外にて

あれわれ候ハシ、たぬき共罷出はらだいこをたゞき、きでんへ沢山おどかし

可申候。化物きへてふだんのことし

どろく
およひの三月

おんねん

受人

うそじや内藤新宿

井戸から化右衛門店

うらめしやぶた右衛門

千住小塚原中宿

いたづらたぬ吉店

どびんやある九郎

神田としま町

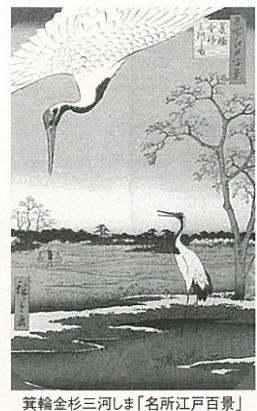
龜持出右衛門殿

人主

● 地名の「つぶやき」 ●

⑧ 南千住のアイデンティティ

〈ふたつの三ノ輪〉



箕輪金杉三河しま「名所江戸百景」

登場人物＊例によつて登場おしゃまな南千住（115歳）&うんと年上なのに実は養女の三ノ輪（地名のつぶやき⑤）参考）

—電停三ノ輪橋で待ちぼうけの南千住—
やだよ、待ち合わせ場所を間違えて。
三ノ輪ちゃん遅いわね。10時に三ノ輪でつて、約束したのに。

—息を切らせて—
姿を見せないから、もしやと思つてみてみればやつぱり。三ノ輪駅でといつただろう。淨閑寺さんにお参りに行くにはここが近いつていつおいたのに・・。
—頬をふくらませて不服そうに—
南千住っ子の私にとてつては三ノ輪といえば都電の終点。地下鉄日比谷線の三ノ輪は台東区だもん。でも、こんな間違えをするのも荒川区と台東区に三ノ輪があるからだよね。三ノ輪ちゃん、どうしてふたつの三ノ輪があるの。
—優しく言い聞かせるように—
まだきちんと話していなかつたわね。よく聞いてよ。私が生まれた年はわからないのだけれどね。物心ついたのが戦国時代の終わり頃、そのころは

「箕輪守屋」、江戸のはじめ頃は「三ノ輪原宿」と呼ばれていたわ。まだ一面原っぱのようなどろだつたから、ついたの地名なのかしらね。そもそも、何で「三ノ輪」かは、自分でよく分からぬけど、菊池山哉という先生がおつしやるには、「水の輪」の意味だそうだよ。いくつもの川筋に囲まれているという意味なのかしらね。体は、この頃まではうんと大きかつたのかもしないわ。なにしろ、下谷通り沿いの円通寺さんを三ノ輪の百觀音（南千住一丁目）、素盞雄神社も三ノ輪の天王さま（南千住六丁目）というくらいだからね。元禄時代にはようやく「三之輪村」の名前で通るようになつたのよ。でもね、忘れもしない延享2年（一七四五）、私の体は二つに分けられ、下が三ノ輪町、上が三ノ輪村になつたの。これが後で荒川区と台東区に別れることになるきっかけだよ。

—養女を気遣いながらやさしく—
それで、どこが境になつたの？
—伏し目がちに—
境になつたのは、小さな堀、「恩川」。金杉村のほうから流れてくる音無川は三ノ輪橋を潜ると山谷堀と別れて隅田川に向かつて東に進む。えらいお坊様の道興准后さんも文明16年から17年（一四八六～八七）まで東国を旅した際、ここを通つて「うき旅の道に流れる思ひ川涙の袖や水のみなかみ」とい

—元氣づけるように—

三ノ輪ちゃん、元氣出しても。今でも「南千住三ノ輪十四ヶ町」の町会・睦が天王さま（素盞雄神社）のお祭りをもり立てているじやない。体が二つになつても、地名を一度変えられても、三ノ輪は三ノ輪、その心は一つでしょ。

（野尻かおる）

【参考文献】『新編武藏風土記稿』（大日本地誌大系）1、『廻国雑記』（群書類從）18、『新修荒川区史』上（荒川区）、『三ノ輪町史』（同町史編纂委員会）、『南千住の民俗』（荒川区教育委員会）、『亀川泰照（三ノ輪町家持の語る町の歴史）』（館報・紀要）1 荒川ふるさと文化館

24名が地名の変更をお上に願い出たんだ。街道筋だったから近くの村から野菜を集めるには便利だつたからね。

—先に話を促すように—

それがね、私が若い頃の地名からとつた「原宿町」だよ。亀吉さんらは「明和の頃（一七六四～七一）に上野国山上久方村（現在の群馬県桐生市）生まれの半五郎さんがここに流れてきた名主になり、故郷の三輪神社に因んで原宿町を三ノ輪町に変えてしまつた。地付の百姓はこれを原宿としか呼ばない」というんだ。三ノ輪の地名は明和の頃より前につけられているから

屁理屈としかいいようがない。しかも、商売が絡んでるからややこしい。ごり押しがまかり通り、一時私は「下谷原宿町」を名乗つたわけだよ。

名は生きていた」と感動してしまつた。この「菅谷」、読み方は「すがのや」とい、現在の南千住六丁目付近のことを指す。江戸時代の検地帳には「菅谷耕地」と出てくる。他に「菅野谷」や「菅ノ屋」等とも書かれたようであ

る。明治以降は、字名として使用されてた。しかし、昭和7年の区制導入の際に、他の地名と同様、この地名も

も「南千住三ノ輪十四ヶ町」の町会・睦が天王さま（素盞雄神社）のお祭りをもり立てているじやない。体が二つになつても、地名を一度変えられても、三ノ輪は三ノ輪、その心は一つでしょ。

（野尻かおる）

それが、電信柱の札（番号札というらしい。これで電信柱の管理を行う）に残つていたのである。今のところ旧地名が書いてあるのに気が付いたのはここを含め二ヶ所のみである。時には、もちろん車に注意しながらあることはいうまでもない。上を向いて電信柱ウォッチングもいかがだろうか。懐かしい、あるいは目にしたことがない地名に出会えるかもしだれな

..... 街角の しるし ③



今回はコレ！

専門員は見た! ⑤

汐入の水門

あれはてた水門



汐入水門（平成16年春撮影）

荒川区の東端（汐入とよばれる南千住八丁目）、隅田川沿いの道を行くと、古びた水門が立っているのが見えてくる。コンクリートの柱には蔓草が絡みつき、鉄製の階段や手すりなどは錆びて真っ赤、上にある制御室はぼろぼろに朽ちている。もちろん現在は使われていない。水門の前には入り江があり、その周りは切り立つようなコンクリート壁で護岸されている。まだ区内のところどころに見られる堤防、少しオールドな荒川区民にとってはお馴染みの「カミソリ堤防」である。

廃墟のような水門は、新築ビルが放つ明るい色彩のなか、古ぼけた暗い灰色という、好対照的な印象を持っている。しかし、独特の存在感を持ちながらも周囲に気を使うようにひつそりと佇んでいた。

本門の役割は隅田川貨物駅（現在のJR貨物隅田川貨物駅）構内に流れる運河の水を制御して、駅構内及び附近の住宅地への水害を防ぐことだった。明治30年（一八九七）、南千住に隅田川貨物駅が石炭の集散地として開設されると、構内には船舶が出入できるようドックが建設され、運河が掘り込まれた。この駅は鉄道（常磐線）と隅田川の水運を利用する構造になっていたのだが、ことに当時の河川輸送は陸運を凌いでいたという。

この頃の地図で見る汐入は、川と運河によつ

まちを守った水門

今年の夏は全国各地の河川が荒れ狂つた年である。ニュースでは東京の記録的な猛暑とともに、ひつきりなしにやつてくる台風によつてもたらされる甚大な被害が何度も報道されていた。

元来、南千住一帯は低地であり、古くから隅田川の水害と向き合つて暮らしていく土地柄だった。この地に汐入水門が誕生したのは昭和28年のことである。昭和22年のカスリーン、23年のアイオン、24年のキティと大型の台風がたてつけに来襲して水害が続いた時代に水門は建設されたのである。ちなみに同じ頃に「隅田川永久護岸」として登場したのが、いわゆる「カミソリ堤防」である。

本門の役割は隅田川貨物駅（現在のJR貨物隅田川貨物駅）構内に流れる運河の水を制御して、駅構内及び附近の住宅地への水害を防ぐことだった。明治30年（一八九七）、南千住に隅田川貨物駅が石炭の集散地として開設されると、構内には船舶が出入できるようドックが建設され、運河が掘り込まれた。この駅は鉄道（常磐線）と隅田川の水運を利用する構造になっていたのだが、ことに当時の河川輸送は陸運を凌いでいたという。

この頃の地図で見る汐入は、川と運河によつ

ている。

て他の土地から切り離されて、まるでひとつ島のようになつていて。そして新しく出現した運河は、その目的とは全く別に、地域にとって水害の危険性を高める原因になつてしまつた。

水門建設以前の状況を『荒川区土木誌』は「国鉄隅田川貨物駅構内運河の護岸は荷役の関係上非常に低くなつてゐるため、満潮時にはいつでも附近に浸水し、殊に台風など異常高潮時には南千住町の大部分及び台東区浅草方面にまで浸水の被害をこうむつっていた」と記している。明治以降建設された大規模工場をはじめ、日本の近代化・工業化を推し進めた施設が周辺地域に公害・灾害などの弊害をもたらした例は、全国いたる所で見られる。そんな中で周辺地域を守るために（たとえ駅を守るのが第一義であつたとしても生まれた水門の存在意義は地域にとって、大きいものであつたに違いない。

昭和30年代になると、貨物駅では河水輸送が減少し、鉄道によるコンテナ輸送がとつて変わる。そのため使われなくなつた運河は次々と埋め立てられていつた。それは、まちを守り続けてきた水門の役目が終わることを告げる工事でもあつた。運河は昭和45年頃までには埋め立てられたようだから、水門も時を同じくして静かに眠りについたのだろう。

運河の埋め立てによつて隅田川貨物駅と隅田川の関係は途切れてしまい、水門は運河の遺構とともに川辺に取り残されたようなかたちとなつた。

建ち並び、大きなショッピングセンターモオーブンした。再開発による新しいまちづくりは大詰めをむかえようとしている。そして開発の波はもう一息、とばかりに水門へとのびてきている。

平成15年より水門周辺は「瑞光橋公園」と生まれ変わったための工事が始められている。カミソリ堤防を撤去し、運河の遺構まで人が降りられるよう公園になる予定だという。水門も公園の敷地内にあたつているのだが、その処遇は未定のようだ。

現在、水門が存在する意義をあらためて考えてみたい。すっかり様子が一新された街並みのなかに、地域の歴史を見いだすことは非常に難しい。水門の存在とその果たした役割は、水害とともに歩んだ南千住の人々にとって、大雨で水かさが増していく恐怖の記憶とともに忘れる事のできないものであつただろう。水門には消えつある地域の歴史（＝記憶）を見いだすことが可能なのである。また、この水門はかつての景観を知る手がかりとなる建造物であり、さらに隅田川貨物駅における河川流通の歴史を知るための唯一の遺構なのである。

新しいまちづくりに、その地域が歩んできた歴史を生かし、伝えてゆくには、様々な方法が考えられる。住民にとって、地域の歴史と無関係のままそこに暮らすことはありえないはずだ。ひとり佇む水門の姿を見るたび、水門が寡黙な語り部として地域の歴史を示し続けているように思えてならない。

水門が語るもの／再開発のなかで／現在、汐入には高層のマンションが

参考文献 『川と川／暮らし・想い・姿』『荒川区土木誌』